優良経営体事例

株式会社
荒川農園

調査日	平成27年10月20日 平成30年11月19日(更新)
所在地	高松市三谷町
経営主	荒川　鉱章　（　46歳）
主要事業	露地野菜
主要作目	ブロッコリー　15．0ha レタス（ﾛﾒｲﾝ、ｻﾆｰ含む）4．0ha 青ネギ　4．0ha カボチャ　1．0ha
就農タイプ	法人就農→独立（非農家出身）
法人化	平成26年2月（就農後8年目）
従業員	常勤　10名 パート　10名

ヒストリーあらすじ

・荒川氏は愛知県の非農家出身で、香川県内の大学に進学。農業法人でのアルバイトをきっかけに、その法人に就職。約10年間、農業法人での野菜の栽培技術や人材活用方法、農業経営のノウハウ等を学ぶ。

・結婚と住居の新築を契機に独立。配偶者の実家付近で、30aの農地を借りて。アスパラ、エンサイ、ブロッコリーで就農。

・地域に就職という意識を持ち、地域の農地を中心に集積している。地域の農地の維持管理をしやすい、ブロッコリー、レタスを基幹とし、規模拡大を行っている。

・経営理念「いいしごと、いいやさい、いいあした」をモットーに、常に従業員の育成や労働環境の整備には力を入れている。また、農の雇用事業やJA香川県のインターン生の受け入れ等を行い8名の独立就農に寄与した。

エッセンス

●新規就農	・法人で10年間の農業経験。特に4年目より、レタスの栽培部門の責任者を任される。経営者はどう考え、判断するのかを学んだ。 ・結婚、住居の新築を契機に就農。
●地域のつながりで規模拡大	・特に県外の出身ということもあり、「地域に育てられ、地域とともに歩む」という姿勢で、地域での農地の集積と雇用を図る。 ・品目は、労働集約型の品目であるアスパラガスから露地野菜の土地利用型の品目ブロッコリー、レタスへと転換する。
●人を育て、野菜を育てる	・従業員が常に目標を持ち、達成感を得られるよう、各自が作業日誌の記帳を行っている。 ・JAのインターン生の受け入れや農の雇用事業などを活用し、将来の農業の担い手（仲間）づくりも行っている。 ・作業を細分化し、技術レベルに応じた作業を組み合わせることにより、各人の能力が発揮できる。

基幹となるブロッコリー

3年目より導入したネギ

ネギの洗浄作業

従業員全員が笑顔で農業に魅力を

みんなが利用するので整理整頓

ホワイトボードで情報伝達

社員のための寮等を整備

株式会社荒川農園　ヒストリー

就農前

●アルバイトがきっかけ

愛知県から県内の大学

県内の農業法人でアルバイト

●農業法人へ就職

県内の農業法人へ就職
（10年間農業に従事する）

農業の楽しさを知る！

・4年目よりレタス、ねぎ部門の責任者になる。
↓
・栽培技術や農作業の段取り等の習得や人材の活用方法等を学び、実際に実践。

栽培管理の大切さを知る。

就農～2年目（平成18年～19年）

●人生の転換期（平成18年）

・平成18年に法人を退社し、農業経営を開始。
・妻の実家（香川県高松市三谷町）近くで農地を借り、就農。
・定年退職の義父の手伝いを仰ぎながら、農作業を行う。

結婚・住居の新築が
独立就農のきっかけ。

●平成18年
ブロッコリー、エンサイ、アスパラガスで就農

・特に農地の確保が難しかったので、収益性の高いアスパラガスを経営に組み入れた。

栽培面積合計：1.15ha

●平成19年

・自宅周辺（高松市三谷町）農地の集積を開始。
・新品目としてレタスを導入
・雇用を導入。

地域に就職という意識のもと、地域の農地の集積に力を入れる。
栽培面積合計：3.15ha

3年目～6年目（平成20年～23年）

●平成20年～21年
地域に育てられ、地域とともに歩む

・自宅周辺で規模拡大
・アスパラガスをやめ、青ネギを導入。

栽培面積合計：6.63ha

●平成22年～23年
収量・秀品率の向上とさらなる規模拡大

・平成22年は収量・品質の向上を目指し、規模拡大を抑制。
↓目標達成
・平成23年は再び規模拡大（栽培面積約3ha増加）

栽培面積合計：10.66ha

7年目～9年目（平成24年～26年）

●平成24年～26年
人を育て、野菜を育てる

◎人を育てる
・幹部候補生として常時雇用（正社員）を導入。
・休憩所・作業室の改善・拡充
・雇用者に意欲と向上心を持たせるために、作業日誌を義務付け。
・JAインターン生や農の雇用事業の積極的な活用
・農作業をできるだけ均等にするために、作業の省力化や周年出荷体制の確立を目指す。
・栽培管理のマニュアル化や各種仕様の統一化による作業の均一・省力化

9名の常時雇用。
8名の独立就農に寄与。

◎野菜を育てる
・鶏糞などによる土づくり
・排水対策
・マルチ栽培の導入
・連作障害回避のために抵抗性品種を検討
・栽培に力を入れるため、販売はJAに任せる。

栽培面積合計：17.41ha（平成26年）
収量（単収）・品質（秀品率）の向上

・技術と情報交換で若手を育成。

9年目以降（平成26年～）

●就農後9年間を振り返って

地域に育てられ地域とともに歩む
・平成26年2月に法人化（株式会社荒川農園を設立）
・栽培面積は平成18年の1.15haから、平成26年の17.41haへ。
・借入地の地権者は60名、筆数は120余り。

平成26年度全国優良経営体表彰にて農林水産大臣賞受賞

●さらなる挑戦

・若手担い手勉強会（2カ月に1回）に参加。

◎6次産業
・連作障害回避のためのクリーン作物として、サトウキビを栽培。
↓　香川県の伝統工芸の伝承
・砂糖（白下糖）の加工

◎作業を見える化
・従業員間の情報の共有化や独立就農して早期に経営の安定化を目指して、基礎データのデータベース化を進めており、作業に必要な時間・資材等は全てわかっている。
↓　情報の共有化
・地域で独立就農者（のれん分け）を確保育成が比較的容易に行える。

楽しくやりがいのある仕事でないと、良い品物はできない。人の育成・大事にする経営を目指す。

◎H29～夏場新規作物試作検討
カボチャ

株式会社荒川農園　＜課題と対応策＞

フェーズ		就農～2年目 （平成18年～19年）	3年目～6年目 （平成20年～23年）	7年目～9年目 （平成24年～26年）	9年目以降
主な出来事		●高松市三谷町で新居　●結婚 ●農業法人を退職　●独立就農	●露地野菜の規模拡大 ●収量・品質の向上	●法人化 ●常時雇用の導入	●六次産業への挑戦
経営課題	ヒト・組織	本人と義父	雇用を導入	法人化・常時雇用	
	土地・設備	ゼロからの出発（借地）	自宅周辺で借地		
	カネ（借入金）				
	技術・ノウハウ	経験不足		法人化	加工製品、夏場新規作物
	販売・販路	JA系統出荷	JA系統出荷	JA系統出荷	JA系統出荷
	情報	市役所、JA、県			
	地域	信用獲得に大変苦労		地域との関わり再確認	地域との連携
	具体的内容	・農地の確保	・規模に応じた生産工程の確立	・連作障害	・サトウキビから白下糖への加工
対応策		・選択肢を持っておく	・雇用導入による規模拡大 ・土地利用型野菜の要点をつかんだメリハリのある管理作業	・土づくり　・排水対策・抵抗性品種等	・カボチャを夏場新規作物として7試作検討
外部環境			・農大出身者、JAインターンの受け入れ	・三谷駅伝に野菜提供 ・農林水産大臣賞受賞	